

大谷家の没落



ほりひとみ

大谷春治郎は四国は丸亀の出身である。

その母親は小さな藩の藩主の娘で、可哀想にあまりご器量がよろしくなく、村の庄屋の倅政吉に貰われた。哀れに思った両親は娘の為に毎年、秋に幾許かの米俵を積み上げた。それは結構な量であった。ご器量が良ければそれは無かったか、もっと少なかったかもしれないが...

しかし、二人の間に親の心配するような事は全く無く、仲睦まじく暮らし男子三人を授かった。子供は三人共出来が良く、その頃としては珍しく皆学校に行き、特待生となった。

長男久太郎は特に優れアメリカに留学したが、帰国後自動車運転中の事故によりアメリカでの成果も俟たず若くして逝った。

二人の弟は毎年積み上げられる米俵を元手に商売を始めていたが次第に大きくなり、親元からの米俵は無くても充分すぎる具合の身上となった。

二人は両親を連れて上京し、東京は青山で米穀

薪炭商を始めた。青山には連隊があり、元々商才のあった春治郎は瞬く間に大きな米問屋となり連日遊興の限りを尽くした。親が不器量である場合は倅の嫁は美人を選ぶと相場が決まっているようだが、春治郎もまた、器量望みで美しい妻を娶った。彼女は美しいだけでなく、明治天皇のお付きの上臈のところへ下働きに出ていた。その頃の娘は嫁入り前の行儀見習いとして相当な家庭に預けられる慣わしがあった。このあたりになるとおはしたといえども、支度として嫁入り道具位のものを持って行くのが普通だったのでさほど金持ちでは無いが、渋谷村にまあまあの暮らしをしていた両親は、皇居に上がるに見合った物を揃えてくれた。それにより又良い縁も得られたのである。

そのお勤めも終え、今をときめく大きな米屋に嫁入りした妻は、夫の遊び以外は格別の不満も無く暮らしていたのだが……

頭も良く、商才にも長けた春治郎はまた、美しい妻を持ちながら、飲む、打つ、買うに明け暮れ、或る日、米相場により一夜乞食と成り果てた。その時、妻との間には一人息子の政治郎がいた。青山中学に入ったばかりであった。母親みつと美しい妻とりは一夜にして乞食の母と妻に成り果てた。

米屋の倉庫から金庫は云うに及ばず、そして立派な邸宅と家具調度品、妻の贅を尽くした着物の入った箆笥や高価な食器に到るまで、そして母親の嫁入りに際して持ち込まれた由緒ある実家からの家具調度まで差し押さえの赤紙が張られた。相場の失敗に因る膨大な借財の返済が為されなければその赤紙の封印を切る事は叶わぬ。米屋でありながらその日の米にも事欠く毎日は、春治郎の自ら蒔いた種に因るものであ

った。

相場の失敗は何度か繰り返されたが悪運の強い春治郎は失敗しても又、ぶり返し大金を手にしたので、そんな事が春治郎を油断させたのだろう。在る時、まわりが危ぶむほどの大相場を張り、二度と立ち直れないような痛手を受けたのである。差し押さえの赤紙は二度と剥がされる事は無く、身一つで家を出る事になった大谷家はまさにこつじきであった。

青山中学に通う一人息子政治郎はその頃外国から入ったばかりの写真機や無線機の虜となり、金に不自由しなかった親から一般人にはとても手も出なかったそれらの舶来品を好きなだけ買って貰っていた。金額は現在のそれらよりはるかに大きく、桁違いですらあったそうだ。そして或る日、最後の差し押さえとなったのである。

しかし、借金取りもさすがに其処までの知識は無かった。子供の持ち物にそんな高級品が入っ

ているとは露知らなかったし全く興味も示さなかった。そうこうするうちに政治郎はそれらを渋谷村に住む母親の実家に避難させていた。子供心にも危ないと察したのだろう。それらが一家を救い、何十年ののちまで生活を支えてくれる原動力になると思った者はその時は一人もいなかった。品物は何点かではあったがそれとその技術が一家を救ったのである。

許されぬ恋 勘当

一家は破産したが家族全員を引き連れ、相場屋の世話で東京を逃れ、或る地方の都市の駅前の小さな家で小間物屋を始め、細々と暮らし始めた。

それまで行動を共にしていた弟巖は新しき天地を求め、横浜に巣立って行った。相場屋は春治郎に支店としての看板を持たせてくれたが、山っ気の多い春治郎に地道な支店の仕事は向かず、永年の東京での遊興による不摂生がたたり糖尿病に全身を冒されていた。汲み取り屋に、お宅には糖尿病の人がいますか？と聞かれ、何故ですかと言ったら、「汲み取り口に蟻が群がっていますよ」と教えられ医者にかかりだしていた春治郎だが、今のような危機意識は無く、医者という事をあまり聞かなかった春治郎は或る日突然倒れたのである。一人息子政治郎はこちらの中学に転入したが、その頃の田舎の中学といえばバンカラを気取るやからが跋扈し、ほう

齒の下駄が当たり前であった。東京育ちで靴を履き、自転車を乗り回しカメラなど持ち歩く政治郎を軟弱と決め付け、硬派の連中の殴る標的にされていた。そんなわけで中学はあまり行きたい所ではなかったが、転入試験の際に立ち会った教師や何人かの生徒は貧乏で哀れな政治郎を良く庇い、特に友人との交際は死ぬまで続いた。一人は繁華街に大きな店を持つ大富豪で、もう一人は同じく大きな素封家で後に銀行頭取となった。大事に持って来た無線機に似せて見よう見真似で受信機を作り、矢張り東京から持って来た自転車の後に乗せ、近郊を巡りながら金持ちと見ると飛び込んでは、その頃はやり出していたラジオです、と云って売り歩いた。

ラジオが超高級品であった時代が幸いした。その頃のラジオは相当な金持ちしか買う事は出来ず、自然と裕福な家との繋がりが出来ていった。丸亀から来た祖父母はその頃、相次いで世を去っていた。二人は何も言わなかったがどれほど丸亀に帰りたかった事であろう。しかし、その時の春治郎にその力は無かった。幼い頃から大工になりたい、と言うほど器用だった政治郎はすぐに立派なラジオを作った。自分で作るのだから直すのも良く出来る。

母親に良く似た温厚な息子は東京で得た相当な知識を持っていた事も幸いし、NHKの放送開始によって己の行く道を定めたのである。折しも大正十四年、大正天皇崩御後昭和と改元され、同年NHKが放送を開始した時にめぐり合わせた事も政治郎の人生にとって最大の幸運であった。

この地に来た事は政治郎にとって悪い事ばかりではなかった。この商売のお客であった店の近

くの大きな病院に出入りをし、そこの長女貞子と恋仲となり、大反対にあいながらも結婚に漕ぎ付けたのはその最たるものと言えよう。

大病院の娘と一夜乞食の一人息子では反対しない方がおかしい位だが二人の意思は固かった。あらゆる手段を使つての猛反対を潜り抜けて政治郎と一緒に became したが勘当だけは免れなかった。心配した近所の医者か間に入り、何とか結婚に漕ぎ付けたが、それまでには相当世間に喧伝されていて、その当日は病院の入り口から、幾らも離れていない政治郎の家まで人垣でハイヤーが通るのがやっとだった。

ハイヤーは布で目隠しをしてほんの僅かの距離を這うように進んだ。貞子にとって運命を変えた新婚の一日目が暮れかけようとしていた。こんな激動の日は今迄に無かった。もう、親きょうだいから棄てられたのだ。どんな辛い事が待ち構えていようとも、ここが自分の家なのだと思つたとさすがに涙がこぼれ落ちた。貞子の父は

脳溢血で倒れてはいたがこの状態を良く理解していた。

その日、貞子は父の寝所に挨拶に行ったが身内ではただ一人、父親だけが幸せになるんだよと送り出してくれた。この父をおいていくのかと思うと貞子の胸は張り裂けんばかりだった。

普段着にただ一つ、風呂敷包みを抱えた貞子は下を向いたままうちに向って深々と頭を下げ、そして玄関の敷居を跨いだ。門の外にはハイヤーが待ちうけ、道の両脇は勘当された貞子を見ようと黒山の人ばかりだった。

こじきにくれてやる、がはなむけの言葉だった。花嫁衣裳は政治郎の母が用意した。

貞子は如何に反対されたとはいえ、風呂敷包み一つで普段着だった事は何とも肩身の狭い事だったが、一度こつじきになった家族は貞子を暖かく迎えた。この事件は次の日の新聞に載った。美男美女の恋として...事件になればすべて美男美女だ。死体ですらも...けれど相当に有名な結婚であった事は事実だ。この幾日か後、貞子の妹は在学していた女学校で先生に「良家の子

女ともあろう者が何たる事ですか...」と生徒達のいる前で面罵され泣いていた、という事を耳にした若妻は妹達に済まなかったと泣いた。

(続く)